

不思議の国のアリス *Alice in Wonderland* 1933・米国 監督：ノーマン・マクラウド

主な出演者 シャーロット・ヘンリー（アリス）、リチャード・ガレイアー（白兎）、レイモンド・ハットン（鼠）、ポリー・モラン（ドードー）、ネッド・スパークス（芋虫）、アリスン・スキップワース（公爵夫人）、リチャード・アーリン（チェシャ猫）、エドワード・エヴェレット・ホートン（帽子屋）、ジャッキー・サール（ヤマネ）、チャールズ・ラグルス（三月兎）、メイ・ロブスン（ハートの女王）、ウィリアム・オースティン（グリフォン）、ケイリー・グラント（海亀フー）、ルイス・ファゼンダ（白の女王）、フォード・スターリング（白の王）、エドナ・メイ・オリヴァー（赤の女王）、ジャック・オーキー（トゥィードルダム）、ロスコー・カーズ（トゥィードルディー）、メイ・マーシュ（羊）、W.C. フィールズ（ハンプティ・ダンプティ）、ゲイリー・クーパー（白の騎士）

レビュー 映画『ドリームチャイルド』で、渡米したアリスが『不思議の国のアリス』の映画を撮影しているという話を聞く、というくだりがある。その映画というのがこれ。制作年から考えてもキャロル生誕百年を見込んだ企画であろう（『ドリームチャイルド』では海亀フーをビング・クロスビーが演じる、という科白があるが、実際にはケイリー・グラントが演じている）。

ストーリーは『不思議の国』『鏡の国』をうまくまとめて紹介した、といった感じ。時期は冬、アリスと家庭教師の会話のシーンで始まり、アリスが部屋にあるチェスの駒や、窓の外で雪の中を走っている白兎を見たりしている。そのうち眠り込んだアリスを見て家庭教師が部屋を出て行く。そのドアの音で目を覚ましたアリスが鏡の向こうに興味を持ち、暖炉の上へ上って鏡の中へ入り込み……、と『鏡の国』の設定で話が始まる。鏡を抜けると部屋に掛かっている絵の人物が後ろを向いていて（表の世界では正面を向いている）、アリスに気づいて振り返り、アリスと話す、といった場面のあと、暖炉のそばのチェスの駒のシーンになる。その後『鏡の国』と同じく宙に浮かんで階段を下り、家の外へ出たところで慌てふためいている白兎を見て、兎穴へ飛び込む、というところから『不思議の国』のストーリーとなる。原作をかなり端折った形で海亀フーの話まで行き、グリフォンに連れられてアリスが走っているうちグリフォンが赤の女王に変わって『鏡の国』が始まる。同じく『鏡の国』の原作を駆け足で見せながら最後の「女王アリス」のパーティの乱痴気騒ぎがあり、アリスは夢から覚める。『鏡の国』の原作と違い、猫はダイナしか出てこない（だから赤の女王もダイナ）、また、アリスの年齢も「12歳と4ヶ月」とされている。

現在のようなスペシャルメイクの技術がない中で、忠実にテニエルのイラストを再現しようと努力しているのが伺える。動物たちは多くの映画のように役者の顔を出すことはない（そのため、海亀フーを演じるケイリー・グラントも顔が全く出てこない）。「女王アリス」のパーティでは『不思議の国』『鏡の国』の両方の登場人物が出てくるが（この辺、1983年ブロードウェイ版や1985年版『不思議の国のアリス』などと同趣向）、乱痴気騒ぎの所ではマトンやブディングとの会話、あるいはろうそくが伸びたり、白の女王がスープに沈んだりと驚くほど忠実に原作が再現されている。また、原作にない部分でもちょっとした工夫があって面白い。広間のテーブルにあった「私を飲んで」という瓶だが、ラベルには「私を飲んで」以外に「毒にあらず」と書かれている。原作のように毒かどうか調べて、とすると話がだれてしまうのでそうしたのだろうが、微笑ましい演出であろう（ただ、飲むとアリスが大きくなってしまふのだが）。また、帽子屋の持っている時計は短針が月、長針が日を表すようになっている。通常見るような一本針でないところにスタッフの工夫が見える（ただ、その指していた月が5月でも11月でもなく、日の狂いも科白と違い二日以上違ふように見えるのが残念）。また、上にも書いたようにグリフォンから赤の女王へ変身、そのまま『鏡の国』のストーリーへ入るというのも、二つの話をそのまま繋げて無理がない。その結果裁判のシーンはなくなる訳だが、裁判を入れると1985年版『不思議の国のアリス』や1983年ブロードウェイ版のように二つの話の繋がりが不自然になるか、1999年版『不思議の国のアリス』のように『不思議の国』『鏡の国』『不思議の国』とせざるをえなくなる。裁判をなくしたのは見識と云えよう。他に面白い工夫としては、トゥィードルダムたちの話す「セイウチと大工」のシーン。ここでは紙芝居を拡げると、中でセイウチと大工の話がアニメーションになっている、という趣向である。1999年版『不思議の国のアリス』でも同じ趣向が使われている（こちらは人間がセイウチと大工を演じているが）、劇中劇としての「セイウチと大工」を映像化するには良い趣向と思われる。

原作を子供でも楽しめる形でまとめ、映像化したという意味で、良き時代のアメリカ映画といえる。残念ながら自分の観たのはブートレグ版のビデオであり、カットがある。できれば正規版をリリースして欲しいものだ。